

学校法人 吉井学園

幼保連携型認定こども園錦ヶ丘

鹿児島市吉野町にある幼保連携型認定こども園です。

こども主体の保育・食育・自然とのふれあいを大切にした教育・保育を行っています。

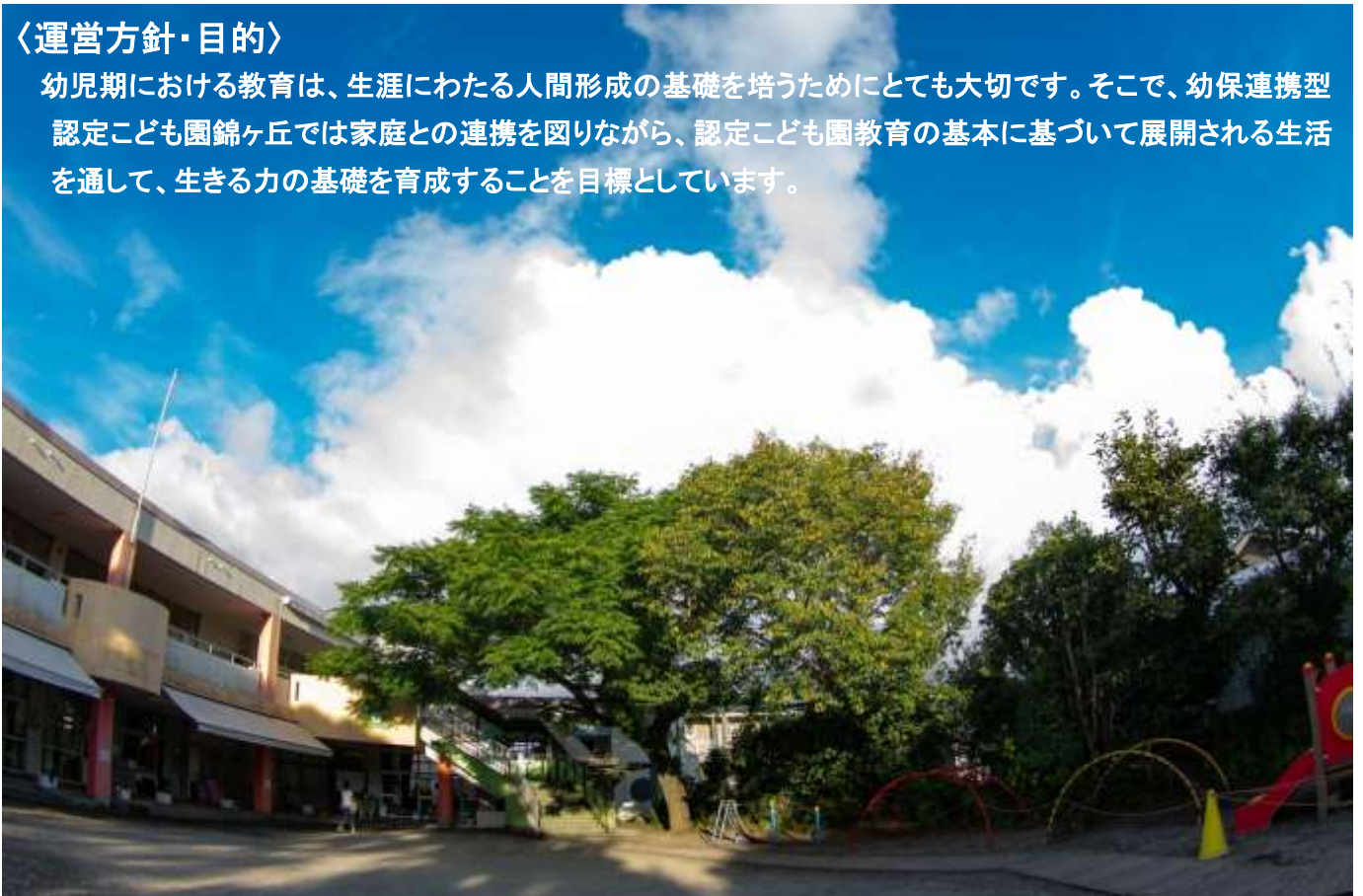
園訓 「強くたくましく 型にはまらない 野性味溢るゝ子供に育てましょう」

初代理事長 堂園 壮意



〈運営方針・目的〉

幼児期における教育は、生涯にわたる人間形成の基礎を培うためにとても大切です。そこで、幼保連携型認定こども園錦ヶ丘では家庭との連携を図りながら、認定こども園教育の基本に基づいて展開される生活を通して、生きる力の基礎を育成することを目標としています。



ビオトープ設置の想い

ビオトープ設置者：前理事長・堂園晴彦医師は、先代から受け継いだ幼稚園と保育園の理事長を兼任してきました。それぞれの園の園訓は、先代の教育方針「強く、たくましく、型にはまらない、野性味溢るゝ子供に育てましょう」を継承しています。

産婦人科医でもある前理事長は、終末期医療の専門施設ホスピスを鹿児島市に設立する他、特別養子縁組のボランティア等をする中で、生まれる命と亡くなる命の現場に長く携わっています。

1999年に、子ども達が過ごす幼稚園・保育園という環境に、命を感じられる場を作ろうと、園庭を大規模改修。－21世紀の子どもたちへのプレゼント－として森を作ることが計画し、ビオトープを整備しました。

前理事長の「都市の中にこそ人間の手で自然を再生するべきだ」という想いは、遊びの場と学びの場が合体したスペースとなり、子どもにとって必要な“生物（ビオ）が生息する場所（トープ）”（ドイツ語の造語）として多くの子ども達に愛されています。

井戸を掘り、小川や池を作り、カエルやめだかや、あめんぼがすめるようにし、池では子どもたちが水遊びもできるようになっています。

季節ごとに咲く花や虫や鳥たちを追いかけ、果実を採り、みんなで一緒に食べるという体験を多くの子ども達にして欲しいという強い想いがありました。

今では、整備から約20年過ぎ、園庭に植えた幼木は、子ども達とともに成長しています。メダカを追いかけたり、水辺の植物を採取したり、ビオトープに生息する多くの虫や生き物を日常的に観察しています。木の実、菜園で育てた野菜は保育活動でクッキングを行い、一緒に食べたりしています。

現在このビオトープは「のはら園」と名づけられ、日々をこのビオトープで過ごしてきた子ども達にとっては、心の原風景となっています。そして、ここで育った子どもが、今度は自分の子どもを連れて訪れるようになっています。

園庭ビオトープ「のはら園」を通して命のはかなさ、大切さ、豊かさを肌で感じ、人として成長すること、次世代に伝えていくことが私たちのこども園の目指すところであり、私たちの園の伝統にもなりつつあります。



ビオトープの活用

環境整備を行い、約10年過ぎたころから生態系が安定し始めました。池に生息するメダカやエビは観察するために捕まえることができますが、小川に返してあげることがルールです。子どもが自分の発想で遊び、自然を活用しながら遊んでいる。「自然や命を大切に作る心を育む」「自然を学び、自然に学ぶ」という理念のもと、在来種にこだわり、地域本来の自然と触れ合うことが出来るような環境を整備しています。



環境整備には、環境カウンセラーや樹木医のアドバイスをいただいています。樹木の伐採等は時期について助言をいただき、地域の造園業者や保護者が組織する「おやじの会」等、地域と保護者が一体となってボランティア活動として、環境整備に取り組んでいます。吉野地域は都市化が進み、商業施設・民家が隣接しているため、地域の方々とも連携を取り、相談しながら環境を整える事も大切にしています。

自然を通して保育をする保育者がその時々々の自然や園庭風景の変化を五感で感じ、子ども達と一緒にこの「のはら園」の自然を楽しめるよう、保育計画や行事を企画しています。日常の活動の中でも「のはら園」を舞台に、子どもが自然や命、環境について主体的に考えることができるよう取り組んでいます。



命を学び 感性を磨く

子どもたちは遊び空間として日常的に園庭ビオトープに接しています。メダカをすくったりトンボやチョウを追いかけたりといった光景が繰り返されています。このように、小さな生き物との楽しい出会いがいっぱいの「のはら園」ですが、命を含む自然の摂理を目の当たりにするのも「のはら園」です。オニヤンマも、すべてが順調に羽化するわけではありません。最後の最後にヤゴの糸が絡んで、飛び立つことが出来ないトンボもいます。外敵がいっぱいの自然界では、それは死を意味しています。

子ども達は、生態系や生物多様性を意識しているわけではありませんが、捕まえたバッタやトンボ、ダンゴムシ、小川で救ったメダカやエビを一匹残らず必ず元の居場所に返しています。それはのはら園のルールとして、年長児から年少児へ代々受け継がれています。園庭の草本・樹木に季節の移ろいを感じ、日々の小さな生物とのふれあいから、子ども達は沢山の事を学んでいます。

「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫を捕まえたこと」

「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」

といった自然体験が豊富な子どもほど、道徳観・正義感が強い事は種々の調査からも明らかになっています。

一朝一夕にそのような資質能力が備わるわけではありませんが、子ども達は、自然との関わりの中で心も体も大きく育ち、園訓でもある「型にはまらない野性味溢るゝ子ども」への手ごたえを感じる事が多々あります。

五感をフルに使い、自然体験を通して「生き物の命」に気づき、感性豊かな心優しい子どもの育成に資するところ大であると感じています。今後とも吉野の自然を活かし、自然を学び、感性を磨く場としてのビオトープ活用を進めていきます。

